かなった最高の親孝行
なければ書く意味がない』

リレー対談

小説だから土方歳三は生きてアメリカに渡り、
源義経はチンギスハンに……の面白さがあっていい
子どもの頃の情熱を失わないという事は
クリエイターとして重要な条件
小説は書いている内に出来上がって来るが、
コピーは独特の感性から生まれる
自分のお金と時間を使っても惜しくないものを持たないと
長生きする意味がない

逢坂 剛 氏
作家

1943 年東京都文京区に生まれる。
1966 年中央大学法学部卒業。同年博報堂入社。
1980 年オール讀物推理小説新人賞受賞。
1987 年『カディスの赤い星』で直木賞受賞。
1988 年同じく日本推理作家協会賞受賞。
1997 年博報堂退社。
2001 年日本推理作家協会理事長就任。（～ 2005 年）
2014 年日本ミステリー文学大賞受賞。
2015 年『平蔵狩り』で吉川英治文学賞受賞。
その他山本周五郎賞・江戸川乱歩賞・日本推理作家協会賞・大藪春彦賞等の選考委員を歴任。また朝日・読売・毎日各紙の書評委員も務める。

時代小説に父の挿絵で共演が
エンタメの極意 『小説は面白く

ジプシーが始めた楽譜のないフラメンコは
元々マイナーな音楽で
いつの間にか芸術的になってきたが、
相互に影響し合い伝承される事がいい
西部劇の復権を願うのは
「正義が勝つ、悪は負ける」ことの大切さを伝えたい
昔感銘を受けた本や映画をいいと感じるのは
それに触れた時の自分に再会出来るから
それはその時代へのタイムマシンなんだ・・・

白鳥 真太郎 氏

写真家

長野県松本市生まれ。国立千葉大学工学部写真工学科卒業後、（株）資生堂宣伝部写真部、（株）博報堂写真部（現（株）博報堂プロダクツ）を経て1989年白鳥写真事務所を設立。1993年写真集『白鳥写真館』発刊。1994年ロンドンにて『SHINTARO SHIRATORI PHOTOGRAPHIC EXHIBITION』を開催。1999年写真集『貌 KAO 白鳥写真館』発刊。2009年イタリアにて写真展『Trapped Women』を開催。2016年『貌・KAO Ⅱ 白鳥写真館「これから…」』を銀座和光ホールにて開催。日経広告賞グランプリ、読売広告大賞金賞、APAアワード経済産業大臣賞他多数受賞。現在公益社団法人日本広告写真家協会（APA）会長、国立千葉大学客員教授。

神田神保町の古き佳き想い出

白鳥 今回、博報堂時代の先輩で作家の逢坂剛さんにお話を伺いたくてお願いしました。会社員時代には、こんな有名な方がいらっしゃるとは知りませんでした。18年前に写真集『貌 KAO 白鳥写真館』の1冊目で撮らせて頂いた時が最初です。

逢坂 博報堂の120年史にも寄稿しました。白鳥さんは早くに辞められましたが、いい会社でしたね。

白鳥 もういろんな所で仕事をしているので、要は「早くフリーになれ」と後押ししてもらった、という感じでした。

逢坂 普通の会社だと他の仕事でお金を稼ぐのは駄目という規定があって、仮になくても周りからちょっと白い目で見られたりしますが、博報堂では直木賞を獲った時も全くそれ以前と変わらない社風がすごくよくて、その後10年勤めました。

白鳥 社屋が田町に移るというのが辞めるきっかけでしたか?

逢坂 そうですね。田町には8カ月通って辞めました。神保町に仕事場を構えて丁度20年です。すずらん通りで、裏にタワーパーキングがあった狭い私立探偵事務所みたいな所で、当時の神保町では相場が20万円位なのにビルが古いのと裏にタワーパーキングがあって、1日に何度も揺れるから7万円、「1週間もすれば慣れますから」なんて言われて・・・最初は「あ、地震か!」と思いましたが1か月もすると地震なのか車の出入りなのかが判るようになってね。でも「これ以上本を増やすと危険だ」と大家さんに言われたこともあって、あえてここに移りました。

白鳥 神保町の再開発で立ち退きみたいな事はなかったんですか。

逢坂 ここが建ったのはその直後で、直接には関係がなかった。再開発の時には、地元の抵抗が強かったですね。

説明会では反対者の怒号が飛び交って大変でした。私も出席者名簿に署名していながら「買う」と言うのも気が引けて……ちょっと高かったしね。

白鳥 私は16年間、神田に通っていましたが、あの懐かしい佇まいも今はなく本の取次店もなくなって寂しいですね。

逢坂 本が重いので、あまり高いビルがない。家並が低くて、空が開けているんです。あのビルが建ったために、神田警察の通りまで何本もあった区道が2、3本潰されてそれが地元住民の反感を買ったんですが、あれからもう17年も経ってるんですね。

白鳥 「バラライカ」という店がすごく好きだったんです。

逢坂 いい店でしたね。それが再開発で立ち退かざるを得なくなったのが一番残念でした。

のんびりしていた広告会社時代

白鳥 私は1973年に博報堂に入社して、資生堂でAPA(エーピーエー/日本広告写真家協会)の入選と特選を獲って会員になった時、資生堂の課長さんが博報堂さんを紹介して下さったんです。博報堂は新入カメラマンが3人決まっていたので「無理かな」と思っていたらその時の常務の方が、私の写真と成績を見て「こういうタイプのカメラマンはいないから採っておいたら」と言って下さったのが、博報堂に入れたきっかけなんです。

逢坂 あの方もなかなかキレ者でしたね。まぁ、あの頃はいい時代でした。

白鳥 写真部の忘年会に浅草の踊り子を呼んだんですよ(笑)「年に1度位いいだろう」ってね。

逢坂 のんびりした時代でしたね。今同じ事をやったら大変ですよ。

白鳥 逢坂さんはPRにおられたんですよ

ね？

逢坂 そう、元々はコピーライター志望で滑り止めのつもりで受けた博報堂に拾われたんですが、結局コピーライターにもなれなくて。

白鳥 直木賞受賞の『カディスの赤い星』の主人公はPRマンでしたね。

逢坂 あれが私とは言いませんが（笑）私が好きなギターとかフラメンコとかスペインの内戦やPRマン等、当時の興味関心を全部ぶち込んで書いた小説です。

白鳥 逢坂さんが初めてスペインにいらしたのはいつ頃ですか？

逢坂 1971年です。本場のフラメンコを観たいと思ってね。伊勢丹会館にあった、エル・フラメンコは昨年なくなりましたが、やっぱり本場で観ようと思ったのが最初です。

白鳥 フラメンコにのめり込んだきっかけは何ですか？

逢坂 先生についたことは一度もないんですが、大学に入る直前クラシックギターを始めたら『禁じられた遊び』や『アルハンブラの思い出』等が簡単に弾けるようになって、だんだん欲が出て来て、ついにバッハを弾くようになりましてね。そしてナルシソ・イエペスが演奏するバッハの『シャコンヌ』を聴いて、是非ものにしたいと思ってやり出したんですが挫折して、その時、ラドリオという喫茶店でフラメンコギターのレコードを聴いたんです。

白鳥 それがきっかけでフラメンコに熱中して、スペインに行くことになったんですね。

逢坂 フラメンコギターを始めたのが21、22歳の頃で、27、8歳で初めてスペインに行く時「ちょっとスペインに2週間ぐらい行ってきていいですか？」「あ、いいよ」なんて感じでね。上司が2週間も、よく休ませてくれたと思いますよ。

白鳥 写真部も大らかでした。期限切れのフィルムがいっぱいあるので、スタジオが土日空いていたりすると「作品撮るなら使っていいよ」と、その現像も会社の人が全部やってくれました。私を育ててくれた博報堂には本当に恩義を感じています。

逢坂 私も最初の志望通りにコピーライターになっていたら、多分作家にはなっていませんでしたね。

白鳥 博報堂のコピーライターに2009年に60歳で亡くなった眞木 準さんは同期で、私を一躍有名にしてくれた「トースト娘ができあがる。」という全日空の広告がありましたね。

逢坂 私にはそういう才覚はなかったですね。小説は書いている内にだんだん書けるようになってきますが、あの短い言葉の感覚は俳句みたいなもので独特の感性がないと駄目ですね。

白鳥 ところでお父様は池波正太郎さんとか藤沢周平さんの小説の挿絵を書いておられた有名な挿絵画家の中一弥さんですよね、104歳まで生きられた。

逢坂 ええ、時代小説専門でね、晩年は私の時代小説にも挿絵を書いてくれました。

人気シリーズを継ぐ苦悩

白鳥 『貌KAO 白鳥写真館』で撮影させていただいた後、逢坂さんも私も大好きな西部劇の話で盛り上がるようになったんですよね。逢坂さんは、スペイン語もそうですが西部劇や神保町界隈を舞台にした小説や「百舌シリーズ」、「イベリアシリーズ」、「禿鷹シリーズ」の様な現代ミステリーや冒険小説、加えて「重蔵シリーズ」という時代劇まで、とにかく守備範囲が広いですね。西部劇を書き始めたのは15年ぐらい前ですか？

逢坂 ええ、2002年に『アリゾナ無宿』、2005年に『逆襲の地平線』を出しました。

白鳥 読んでいると舞台が彷彿と目に浮かんできます。スペインの小径や西部の事等もすごく詳しくて、おまけに時代小説でも感心してしまいます。

逢坂 時代考証に凝るというのは親父譲りでしょうね。時代小説では「小紋の着物」がどんなものか分からなくても書けますが、絵に描く時にはそれらしく描かないといけないでしょ。小学生の頃、親父に資料を神保町へ買いに、よく連れて来られましたよ。

白鳥 それが逢坂さんの神保町のルーツですね。現代小説から時代小説、西部劇というふうに作品の幅を広げられましたよね。

逢坂 最初はハードボイルド小説から書き始めましたが、親父が時代劇専門でしたので、親孝行でいずれ親父に描いてもらって父子共演というのもいいな、と思っていました。

白鳥 池波正太郎さんは、逢坂さんご夫妻の仲人さんだそうですが、「長谷川平蔵シリーズ」は、池波さんとのご縁がきっかけですか?

逢坂 そうです、亡くなってもう27年ですが、ある小説雑誌が池波さんの没後20年の時に企画を持って来たんです。『鬼平犯科帳』の鬼平を他の作家が書くのはおこがましいとお断りしたんですが、「とにかく記念ですし、逢坂さんが引き受けてくれないと他の若手作家も書かない」と言われ、池波さんの真似をしない様苦労して1本だけ書きました。そしたら結構面白かった様で、結局6本書いて『平蔵の首』という本が1冊出来たという訳です。その後2冊目の『平蔵狩り』を書き、3冊目の『闇の平蔵』を書き、今度は4冊目を書かなくてはいけないんです。非常におこがましいのですが、出版社と読者の要望があると「ちょっとやってみようか」という気になって、これが作家の辛いところですね。池波さんの作品は誰もあんな風に書けません。あのテンポのよさ、改行の多さ、「……。」だけで1行とかね。元々新国劇の脚本を書いていた人なのであの間というのが独特なんです。宮本武蔵をいろんな人が書いてるのと同じで、実在の人物「長谷川平蔵」を書く事については、どこからも文句は言えないわけです。でも、長谷川平蔵のイメージを池波さんが創ったわけですから、いつまでこれを書くのかと思ってその後を引く人間は辛いですよ(笑)

白鳥 楽しみですね。ところで、最新刊『果てしなき追跡』では、何と土方歳三が五稜郭で死なずに米国に渡って活劇を繰り広げるというシリーズが始まりましたが、「第1巻終わり」ってなっていたので、これは続きますね。

逢坂 あれは出版社の要望でね。15年程前の『アリゾナ無宿』と『逆襲の地平線』という西部小説の前段の話ですよ。2冊書いたところで出版社の編集長が変わってね、西部小説は売れないからと中断したままだったので、14、15年ぶりに中央公論で「西部小説を書く」と言ったら「前段の話で時代劇だと思わせてスタートしてくれ」というリクエストがありました。実に姑息なやり方ですけど、その編集者の熱意に動かされた(笑)それで土方であることを最初から明かしたんです。

白鳥 源 義経=チンギス・ハン説より面白いなと期待しています。

文章と写真の「背景」を描く力

逢坂 私は土方歳三が好きで、司馬遼太郎さんの『燃えよ剣』は本でもテレビドラマでも見ました。栗塚 旭さんが土方歳三を演じてヒットしたんですが、原作者の司馬遼太郎さんは最初テレビドラマ化を断っていたんです。東映が市川右太衛門を近藤勇として『新撰組血風録 近藤勇』という映画を作ったんですが、相変わらず近藤中心のストーリーで、原作の意図が反映され

ていない。そのため司馬さんは、以後の映像化を許可しなかった。ところが、新撰組の正装をした土方歳三の栗塚氏を見せたところ、奥方が「素敵な方だから是非」と言って決まった、という伝説があります。

白鳥 私は逢坂さんより4歳下ですが、結構見てますよ（笑）

逢坂 土方歳三が好きになって、様々な本を読んでいると確かに撃たれて死んだけれど遺体はどこに行ったかわからない、と書いてあるので死んだ事も特定出来ませんよね。じゃあ死ななかった事にしたっていいじゃないか、と作家は考えるわけです。その構想はもう20年以上前から持っていました。

白鳥 『アリゾナ無宿』の頃からですね。

逢坂 勿論そうです。最初は時代劇と思わせて……というのが、ちょっと苦し紛れですがね（笑）後は西部劇になるのですが、そこに侍を何人か出してくることによって多少は時代劇のテイストをつけないといけない。「イベリア・シリーズ」でヨーロッパから見た第二次世界大戦のクロニクルを書いたのと同じ発想でね。リトル・ビッグホーンの第七騎兵隊の全滅のところで中断していたので、このあとOK牧場の決闘やジェシー・ジェイムズの暗殺、ビリー・ザ・キッドの死などのエピソードが、あとに続く予定です。南北戦争からフロンティアが消滅した1890年までを、書いていこうという構想です。

白鳥 西部劇ファンにとっては何とも嬉しいシリーズですね。

逢坂 続きは今年の夏から『中央公論』で書きますが、『中央公論』がまさか西部小説を書かせてくれるとは思いませんでしたね。ただ、読者層としては割と高齢の読者が多いので、懐かしがってもらえると思います。

白鳥 止まっていた「百舌シリーズ」も、一昨年に続きが出ましたね。

逢坂 「百舌シリーズ」も本当は3本で終わる予定だったのが現時点で6本になっています。普通主人公が死ぬとシリーズも終わるので そういう意味で主人公を殺したんですが「それでもまだ書け」って（笑）書けば書けるんですね。「禿鷹シリーズ」も3作目で殺そうと思ったら「殺すな」と言われて5作、ありがたいと言えばありがたいですね。

白鳥 作家がすごいと思うのはストーリーの構築の仕方ですね。カメラマンは対象を見て、見たままを何とかしようとします。その背景から全部自分で作っているところに、作家のすごさを感じます。

逢坂 私は白鳥さんの写真を見ると、その人物の背景がわかりますよ。勿論目には見えないけれど、その人の人生が何となく浮かんできます。それは経験を積む事で、自分ではわからなくても、他人から見るとわかるんじゃないでしょうか。

白鳥 私も自分なりの方法論というのが出来上がっているので、それが特色になって仕事がいただけるんだろうと思います。

逢坂 被写体の人生とカメラマンの人生が融合したものが焼き付けられているんですよ、感覚的にね。小説も多分そうじゃないかと思いますね。

資料をいかに読み いかに生かすか

逢坂 西部小説は別として、白鳥さんは私の作品の中でどのジャンルが一番お好きですか？

白鳥 そうですね、一番ハマったのは「百舌シリーズ」です。昔は翻訳小説も好きで原語で読めればいいんですが、日本語になっていない言語を強引に文章にした翻訳小説がある時から読めなくなりました。翻訳小説は日本人にとってちょっと居心地の悪いところがありますね。

逢坂 翻訳ものについては原文にも問題が

あると思います。と言うのは、アングロ・サクソンが書くものは視点がめちゃくちゃでしょ？ そういう点で翻訳調の文章がだんだん疲れてくるんですよね。先日、ある芥川賞作家の最新作を読みましたが、視点がだいぶ乱れていました。話は面白かったんですが文章には大いに異論があります。純文学をやる人は志が高いのかもしれませんが、文章の巧さは北方氏とか大沢氏のエンタメ系には敵いませんね。やっぱり巧いですよ。

白鳥　昨日『小説家・逢坂剛』を読み直したんですが、「面白くなければ書く意味がない」というのが印象的でした。『疫病神』を書いている黒川博行さんも、サッと一日で読み終わって忘れてくれてもいいけど、その場をともかく楽しませたいと言っていますね。

逢坂　それがエンタメの極意ですよ。書く側は何か月も苦労して書きますが、読む側は1日で、それはそれでいいと思います。

白鳥　私は、本業以外にどう時間を過ごすかと言えば、いかに自分の人生を楽しく豊かにしようかと考えているわけです。そんな時に、小説にしても映画にしてもそういうものがいっぱいあると嬉しいですね。

逢坂　自分のお金と時間を使っても惜しくないというものを持たないと、長生きする意味がないですよね。

白鳥　私は寝る前に必ず1、2時間本を読みます。枕元にこれから読もうという本が溜まっていることの嬉しさって、あるでしょう。

逢坂　それも電子書籍じゃ駄目、何冊も積み重なってないとね。新聞だってそうですよ。時代が変わってきても自分の中では変わらないんです。

白鳥　仕事が終わったと同時に資料はどうされますか。

逢坂　時代考証に関わる資料は、貸し倉庫に1000冊は越えると思います。処分してもいいんですが、何かの時に必要になるかもしれないと思うと、捨てられません。苦労して集めたものですからね。

白鳥　どこにどの資料があるか把握しておられますか？

逢坂　ええ、どこに何があるかわかりますよ。やっぱり取っておく意味があると思います。白鳥さんも昔撮ったフィルムが、沢山あるでしょう？ フィルムはどうやって保管していますか？

白鳥　データ化しろと言われますが、データ化する時間が取れない程膨大で、松本の実家の地下倉庫に作品をしまっています。オリジナルのフィルムも、なるべく乾燥させない様にボックスに入れて徐々に松本に移動させています。

逢坂　確かにデータ化すると、場所を取らなくていいんですが、プリントした時にフィルムとデータでは、違ってくるでしょうね？

白鳥　そうですね、オリジナルのポスター等も捨てられません。「としまえん」の仕事をしていたあの時代のポスターも歴史になってきています。

逢坂　あれはもう風俗資料ですね。あと100年もすれば、本当に貴重な資料になりますよ。私のは時代小説の資料が多いですね。作品を書く上で、江戸時代の会話を再現するのが、一番難しいです。江戸時代は「です」ではなくて、皆「ございます」や「だ」と言い切っていた時代ですからね。

白鳥　最近は言葉の乱れがひどいと言われていますが、どうお考えですか？

逢坂　双葉社から出ている『小説推理』という月刊誌の巻頭で、「剛爺の平成言葉とがめ」で言葉の遣い方がおかしい、という話の連載をやっています。

白鳥　この歳になってCSの時代劇で古いのを見ていると、ひどいなぁと思います。

逢坂　カタカナ語が出てきたりね（笑）まぁ、娯楽ものだからいいんですが・・・。

白鳥　黒澤 明さんは流石にちゃんとしていましたが、いわゆるエンタメ系のB級映画と言われているものはひどいですね。

逢坂　まぁ、あれは時代劇と言っても鬘を被っているだけですから（笑）今はワープロで原稿を書いているので、検索をかけて「です」を全部直します。「です」や「ございます」が混在してチグハグになるのが、一番可笑しいんですね。北方謙三氏もずっと現代言葉で徹底していますし、そういう特徴や自分なりのルールを持っていないと、作家というのは安きに流れてしまいます。

白鳥　逢坂さんのおっしゃっている「ハードボイルド」の定義というのは、心理描写等を一切排除した映像描写みたいな事ですよね。

逢坂　「男の生き方」とか「男の生き様」の様に理解されることが多いですね。ハードボイルドというのは、私は文体を表すものととらえています。その典型がダシール・ハメットで、氏は心理描写を一切しないで『マルタの鷹』と『ガラスの鍵』を書き上げています。心理描写をせずに話の筋を解らせるというのは至難の業です。そういう意味でも、ダシール・ハメットは本当にすごい作家です。センチメンタルで甘い、チャンドラーの方が日本では人気があるのかもしれませ

んが。

白鳥 村上春樹さんが訳したりしていますね。

逢坂 昔は私もチャンドラリアンの一人でしたが、歳を取ってくるとダシール・ハメットのストイックなスタイルがいいな、と思います。私もやろうと思いましたが、とにかく全員の心理描写なしというのは本当に難しくて、ハメットはよくやったと思います。私の場合は主要な人物の心理描写をしないというやり方でした。例えば禿鷹シリーズの主人公、禿富鷹秋、百舌シリーズの主人公、倉木尚武でもいいんですが、それを端から見た人の心理、つまり人がどう見ているかで書こうという工夫をするのが、作家の苦しみでもあり楽しみでもあるわけです。

若い日の自分に出会う タイムマシンとは

白鳥 最後に西部劇の話を少しお伺いします。

逢坂 若い人は、西部劇というものを映画館で観たことがなくて、ちょっと年下だと「マカロニ・ウエスタン」でしょ？ 我々ハリウッド西部劇ファンからすると、マカロニは西部劇じゃないんです。6連発しか撃てないのに十何発も撃ったりして、あれじゃ漫画ですよ。ハリウッド西部劇を衰退させた、ひとつの要因でしょうね。

白鳥 一番のお好みは『決断の3時10分』ですよね。2007年のリメイク版『3時10分、決断のとき』はどうでしたか？

逢坂 まぁよく出来ていた方じゃないですか。先頃公開された『マグニフィセント・セブン』もそうですが、ハリウッドが本気だとそこそこのものをつくります。去年、デンマークとイギリス、南アフリカ共和国が共同製作した西部劇『悪党に粛清を』は、時代考証もよく出来ていましたね。

白鳥 ええ、私も観ました。

逢坂 マカロニもクリント・イーストウッドの3本ぐらいまではまあ観られましたが。

白鳥 『荒野の用心棒』というのは、黒澤さんの『用心棒』が原作ですから、それはよく出来ていますよね。

逢坂 ジュリアーノ・ジェンマとかフランコ・ネロ辺りからおかしくなりましたね。西部劇はやっぱり、ハリウッドですよ。でも、ジョン・ウェインのようなメジャーじゃなくて、ランドルフ・スコットとかジョエル・マクリーがいいですね。

白鳥 私が幼稚園児の頃、実家の隣をプレイガイドに貸していたので、当時、西部劇のポスター等いっぱい貼っていました。ジョン・ウェインのイラストはクシャクシャな顔で、ランドルフ・スコットはすっきりした二枚目だったので、当時はランドルフ・スコット派でした。ただ映画を観るようになって子ども心に『シェーン』という作品に、ものすごく打ちのめされたのを覚えています。

逢坂 あれはいい映画ですね。

白鳥 ガンスピンを初めて覚えて、中学生の頃『ララミー牧場』とか『シャイアン』、『ローハイド』を観るようになりました。高校時代に『リオ・ブラボー』が劇場で再上映されて、青く光るコルト45なんか見て完璧に西部劇ファンになりました。

逢坂 『ベラクルス』は観ましたか？

白鳥 観ましたよ。もちろんリバイバルですけど。

逢坂 高校の頃『ベラクルス』を観て、バート・ランカスターのガンさばきにハマって、今でもやってますよ。

白鳥 NHKで『ローハイド』を再放送した時に、逢坂さんがガンベルトとコルト45を持ってきて番組の冒頭でやったのを見て、もう1回やり出そうと思ってアメ横までホ

ルスターを買いに行きました（笑）

逢坂　大人になって、恥ずかしいと辞めてしまう人がいますが、別に大道の真ん中でやるわけではないので、いつまでも子どもの頃の情熱を失わないという事は、クリエイターの重要な条件だと思います。もうひとつ、西部劇を復権させたい理由は「正義は勝つ、悪は負ける」という事の大切さです。

白鳥　ガンさばきもですが、『カディスの赤い星』のコンサートで弾いてらっしゃいましたが、フラメンコギターはまだ弾いていますか？

逢坂　時々ね、コンサートでは座興で弾いています。フラメンコは、今でこそYouTubeで見られるしCDも出ていますが、50年前は全くデータがなくて、オープンリールにプロのすごい速弾きを録音して、それを2分の1の速度で再生して音を拾いながら自分で楽譜を作りました。音楽は開成で覚えただけで、正式な音楽教育を受けたわけではありませんが、それでも楽譜は書けましたし、そういう楽譜が何十曲も残っていますよ。

白鳥　耳でコピーされたんですね。

逢坂　フラメンコはジプシーの人達が始めた音楽で、元々楽譜がなくて目と耳で覚えるものです。でもそれが一般的になってくると、楽譜がないと駄目だという事になったんです。パコ・デ・ルシアは楽譜なしで覚えたし、『アランフェス』は見様見真似で覚えたそうです。私の知人の、クラシックギタリストの福田進一が全部教えたと言うんですから、すごい記憶力ですよね。

白鳥　我々の頃はフォークブームで、ジョーン・バエズやピーター・ポール&マリーの曲を小室 等さんが採譜して、ソノシートと一緒に売っていたので、それを聴きながら一所懸命やったものです。その後、カントリーの方に路線変更したんですが、あの頃フラメンコに目覚めていたらよかったのかなと思います。

逢坂　ジャズからフラメンコに転進した人で、フラメンコギター界で唯一のメジャーと言ってもいいギタリストに、沖 仁がいます。

白鳥　少し前ですが、『ヨルタモリ』にも出ていましたね。

逢坂　私が、一緒にコンサートを始めた時、彼はまだ無名でしたが、今はすっかりメジャーになって、コマーシャルでも弾いています。我々からすれば、フラメンコはマイナーな音楽でいいと思いますが、いつの間にかアントニオ・ガデス舞踊団のように、芸術的にもなりましたね。両方がお互いに影響しながら、フラメンコが残っていくというのが、一番いいと思います。沖 仁は実にギターが巧いし確かにフラメンコ風ではありますが、洗練されすぎて本来のフラメンコから、少し離れているような気もします。スペインでもそうですが、それは彼のせいではなく、世の中の動きなんです。

白鳥　それはちょっと残念ですね。

逢坂　日本には、非常にわかりやすい、古き佳き時代のフラメンコがあります。元々フラメンコというのは、簡単なことを深くやる音楽なんです。

白鳥　でも、ノスタルジーではないけれど、あの時代に自分が経験したものをもう一度見たり読んだりすることの素晴らしさ、感受性が一番強かった頃に感銘を受けた映画や本を、今もう一度受け入れるのはいいですね。

逢坂　昔観た映画や昔読んだ本がいいと思うのは、それに触れた時の自分と再会出来るからだ、と思います。映画も同じですよね。

白鳥　古い映画は、逢坂さんが西部劇だけで5000タイトル以上持っているとおっしゃっていて、私も全部まとめて5000ぐらいあるんです。自分の人生のある時期に戻るにはこれを観ればいい、というその時代に繋がるタイムマシンなんですね。今日は楽しいお話をありがとうございました。

逢坂　こちらこそありがとうございました。